

序 文

木澤義之

(神戸大学医学部附属病院 緩和支援診療科)

2018年4月から末期心不全が緩和ケア診療加算の適応疾患に加わった。わが国の緩和ケアは今までがんに罹患した患者・家族を対象として発展してきたのは周知の事実であり、これは大きな変化とすることができる。そもそも緩和ケアはその対象とする疾患を問わず、すべての生命の危険がある疾患に直面している——つまり、治療によって治癒する可能性もあるが、死亡する可能性もある患者にも——その必要性に応じて提供されるものである。

循環器疾患はわが国の死亡原因疾患の第2位であり、そのなかでも心不全は大きな割合を占める。この白書では、循環器の緩和ケアの現状を overview したうえで、その道のエキスパートが現在の取り組みの工夫を紹介し、未来予想図を描いてみせてくれることになっている。

本書が、心不全の緩和ケアに関する誤解や誤った先入観、たとえば「循環器疾患の患者は最後まで改善の可能性があるので緩和ケアは提供できない」、「循環器疾患はがんと違って痛みがないので緩和ケアの介入の余地がない」、「循環器の緩和ケアは難しい」などが正しく理解されることの助けになり、循環器疾患に対する基本的緩和ケアの教育・普及・実践が広く行われ、すべての心不全患者が基本的な緩和ケアを受けられるようになり、そして complexity (複雑さ：一例として緩和困難な苦痛や心理社会的問題、治療の中止や差し控えのコミュニケーションなどがある) が高く、より専門的な介入が必要な患者・家族には専門的緩和ケアが適切に提供できるようになるための「きっかけ」になることを願ってやまない。

また、心不全への適応拡大とそれによる成果(患者家族の QOL, QOD の向上)が評価され、COPD, 間質性肺炎, 神経筋疾患, 認知症などにもその適応が拡大されることを期待したい。